

「いろはうた」と「あめつちのうた」「たみにのうた」

「いろはうた」がはじめに文献として記載された資料が先回五十音図でも触れた『金光明最勝王經音義』(一〇七九年)です。

日本語のすべてのかなを用いて、同じかなは二度用いない規範をもつて七五調八句のうた(今様うた)としたのが「いろはうた」というものです。十一世紀の識字階層にとって学習かなの一覧表をなしており、かつ「うた」の意味合いを保持しています。

いろはにほへと	色は匂へど
ちりぬるをわか	散りぬるを
よたれそつねな	我が世誰ぞ
らむうゐのおく	常ならむ
やまけふこえて	有為の奥山
あさきゆめみし	今日越えて
ゑひもせす	浅き夢見じ 酔ひもせず



このうたは、多くの謎を醸し出しています。和歌の世界にも韻があるとすれば、七行七文字で表記されたこ

との意味合いが見えてくるのです。脚韻部分が続けて見ますと「とがなくてしす」となり、「咎無くて死す」というメッセーじが見えてきますし、頭韻部分が続けて詠んでいきますと「いちよらやゑ」で「いちよらやあゑ」「いゑす」ということばが見えてきたりします。さらには、「ほ(本)を津のこめ」というメッセーじなどもあるのだと云います。このうた自体が暗号のようになっていて、ことからこの真偽はともかくも多くのことが云い伝えられてきました。江戸元禄時代の赤穂義士の討ち入りの数四十七名と重ね合わせ、後には『仮名手本忠臣蔵』という作品が世に流布したのもこれを知っていたからにはほかならないでしょう。

作者は、未詳ですが、言い伝えには、「弘法大師空海」の名が常にこのうたの制作者として意識された時代が訪れます。築島裕著『歴史的仮名遣い』その成立と特徴(中公新書)に拠れば、一一〇八年に空海の「いろは歌」の供養『江談』(大江匡房『江談抄』)↓後の『河海抄』のなかに引用)が行われています。さらに、十二世紀中頃に、高野山覚鑿が『密厳諸秘釋』の「伊呂波釋」項目において、『大般涅槃經』の文言の意味合い「諸行無常是生滅法 生滅滅已 寂滅爲樂」と共通することを伝えるようになっていきます。

しかし、日本語學の検証に従えば、「弘法大師空海」(七七四―八三五年)の作ではありえないことになりま。なぜなら、ア行のエとヤ行のエは、十世紀中頃までは共存かなであったからです。この二音節「e」と「ye」は、発音のうえで区別されこれを書き分けていたからです。ですが、この「うた」には、「え」の音は「今日越えて」ヤ行の「ye」の例)が一度用いられているに過ぎません。空海の生きた時代の「え」の音節は、二種類あったからです。

何故、伝説対象人物名として、「弘法大師空海」を制作者としたか、これを思うとき、日本の人物像のなかで、「聖徳太子」と「弘法大師空海」とは、多種多様な伝説を織りなすいわば伝説世界の双壁なる人物と言えましよう。七五調八句のうた(今様うた)の形式が成されるのは平安時代後期(西暦の一〇〇〇年以降)ですから、空海の作とは認められないのです。

このうたの成立以前になつた「うた」として、「あめつちのうた」と呼称されている「うた詞」があります。時期は、十世紀の中頃(村上天皇の御代九四七〜九六七年)でかな四十八文字を一字の欠落無く、一字の重複もせず並

べています。原文はすべて「かながき」されています。

あめ	つち	ほし	そら	天地	星空
やま	かは	みね	たに	山川	峰谷
くも	きり	むろ	こけ	雲霧	室苔
ひと	いぬ	うへ	すゑ	人犬	上末
ゆわ	さる	おふ	せよ	硫黄	猿 負ふ為よ
えの	えを	なれ	ゐて	榎の枝を	馴れ居て

この「あめつちのうた」は、「いろはうた」と比較していくと、どのような特徴が見えてくるか、且つ又、この制作過程とその人物とはを考えることにしましょう。

日本語の漢和字辞書として十世紀前期である西暦九三〇年代に『倭名類聚鈔』(和名抄)が編纂されました。この編者は、源 順(九一一〜九八三年)という人物で、二十四歳の頃に勤子内親王の命によって撰述されています。彼は、三十六歌仙の一人で知られ、和漢の学識を備えた人です。この辞書などを、私たちは「古辞書」と総称しています。『日本語古辞書を学ぶ人のために』(西崎亨編・世界思想社刊)の一〇八頁〜一一五頁・二六四頁〜二六五頁を参照願えればより明確になります。この語彙項目分類の基準となるのが「あめつちのうた」詞の「あめ」から「きり」までが意味の上で繋がっていることに気づかれるでしょう。「天部」「地部」「水部」となっていて、この基準が意識されています。「あめつちのうた」作者は、この源順自身です。一音節の単語を連ねてゆく形式で、最後の最後までこの形態を守り続けることはありませんでしたが、歌の調子を保ちつつ最後まで持つて行った度量は見事です。その末句の理合は、まだ完璧には理合されたとはいえないでしょう。鉱物の「硫黄」と動物の「猿」、この猿が「負ふ為よ」そして、「榎の枝を 馴れ居て」とした辻褄をどう読み取ることができるかでもあり

りましょう。「えの えを」の表記が「いろはうた」とは異なっています。これがア行の「e」とヤ行の「ye」であり、重複表記でないから四十八音節の時代と位置づけられています。

(*参照 江戸時代の文政十二(一八二九)年成『古言衣延辨』加賀藩士奥村榮實編)

<http://www.akenotsuki.com/kyookotoba/shiryoo/eyeben/>

これに加えても一つ、「たゐにの歌」を知っておきたいものです。字母歌「たゐに」が載っている『口遊くちずさみ』(名古屋市大須観音真福寺、覚鑿を祖とする真言宗智山派の寺に写本が現存する。*『口遊注解』幼学の会編、勉誠出版刊)は、その序文によれば、天禄元(九七〇)年に、源順(みなもとのしたかふ)の弟子である源為憲(みなもとのためのみ)が、藤原為光(後に太政大臣)の長男で、当時七歳だった記憶力抜群の松雄君のために、暗誦用に作った教科書と云われています。

『口遊』 <http://heianjiten.fc2web.com/kutizusami.htm>

字母歌「たゐに」	たゐにの歌
たゐにいて	田居に出で
なつむわれをそ	菜摘む我をぞ
きみめすと	君召すと
あさりおひゆく	求食り追ひ行く
やましろの	山城の
うちゑへるころ	打酔へる子ら
もはほせよ	藻は干せよ
えふねかけぬ	え舟繫けぬ

①「いろはかるた」の東と西。 <http://www1.odn.ne.jp/haru/data-list/karuta.html>

現代版「いろはかるた」

Aセキュリティいろはかるた — 情報セキュリティブログ — 日立システム

<http://blog.hitachi-system.co.jp/12/>

B 防災いろはかるた

<http://www.nhk.or.jp/nagoya/bousai/karuta/meido.html>

② 寄席・料亭の下足札。江戸の町火消しの組名。

③ 寺子屋教育

山はまだいいの字も知らぬいろはかな

ちりぬるといろはをよむか風の声

風の手もいろはの後あとやちらしがき

雨露は木々の色葉いろはの師匠かな

俳諧連歌と「いろはうた」

春ごとにいろはの文字一くだり

やまけふこえて帰るかりがね 《新撰大筑波集》

もともいひけりめともいひけり

いろはよむ指の下なる字を問へば 《新撰大筑波集》

「いろはうた」文字仕様の謎立て

〇ろはにほへと いはなし

〇いろはならへ かむなかけ 《なぞたて》

『古今著聞集』和歌第六に、

一六二 **いろは連歌**に小侍従難句を附くる事並びに大進將監貞度が附句の事

同御時の事にや、いろはの連歌ありけるに、たれとかやが句に、うれしかるらむ千秋萬歳としたりけるに、
此次句にるもじにやつくべきにて侍る。ゆゑしき難句にて人／＼あんじわづらひたりけるに、小侍従つげ
る、

ゐはこよひあすは子日とかぞへつゝ

家隆卿の家にて、この連歌侍けるに、

ぬれにけりしほくむ海士のふぢ衣

大進將監貞度といふ小さぶらひつけ侍りける、

るきゆく風にほしてけるかな

人／＼とよみて、るきゆく風をわらひければ、「さも候はずとよ。ぬもじの次はるもじ

にて候へば、かくつかうまつりて候。なにの難か候べき」とちんじたりけるに、いよ／＼わらひけり。小侍従が

もどきの句といひつゝし。
とある。小侍従は巧みさを賞賛され、大進將監貞度という小侍は、意味不明な付句をしたため、一座の物笑い
となると云つた筋立てである。

江戸時代の式亭三馬戯著『小野篁謙字盡』になると、

いろは新字 四十七字をやう／＼のごとでこぢつけた○浅香山を習ふやまとだましるも。君まぐらを習ふ書家もナント及ぶまい

諸方無性 しよほうむせう いろとさけにわ。みなまよひやす。

色酒皆迷安

身性滅法 しんせうめつぽう ちりうごくゆめ。かねのほしきは。

散動夢金欲

惣別不粹 そうべつがすい たれもふえるぞ。つらぬ。

誰充滿辛氣

不食貧樂 くはずへひんらく おへぬをあゑてせむ。

寂滅敢而爲

といった、「こぢつけ」式の「いろはうた」が登場してくるのです。

《参考資料》『日本語の歴史』4移りゆく古代語・平凡社刊

文献資料を読む《古代編》学生リポート「いろはうた」PDF版

《参考HP》「いろは」の話

「いろはうた」と「あめつちのうた」(平安時代成立)

五十音圖のはなしと音訓について

文字資料(漢字・ひらがな・カタカナ・ローマ字)から日本語學資料へ

一 漢字(真字・真名)

A, 漢字音:

1, 吳音(揚子江下流域南方系)↓朝鮮半島経由)↓對馬音)

2, 漢音(北方黃河流域北方系・唐の都長安)↑遣唐使)↓音博士(多のはかせ)である續守言(しよくしゆげん)・薩弘格(さくこうかく)かぐらを招聘し、学生・僧侶が学習(持統天皇五年(六九一))。

※《実例》繪 エ「吳音」カイ「漢音」

3, 唐宋音(元・明・清三王朝:鎌倉・室町時代)↓禪僧・貿易商

※《実例》黒き法被を纏つた胡乱な男が暖簾をくぐりて饅頭屋に入るやいなや手に携えし扇子を徐に開き、翳し提灯の火を揺らした。

《参考HP》音韻學入門 <http://www.for.aichi-pu.ac.jp/museum/pdf/oningaku.pdf>

研究論文一覧

B, 混種音訓:重箱読み:「縁組」「格下」「樂屋」「臺所」

湯桶読み:「早番」「身分」「荷物」「黒幕」

C, 熟字訓:「飛鳥」「斑鳩」「春日」「紫陽花」「梅雨」

「旅籠」「浴衣」「老舗」「草鞋」

二 カタカナ・ひらがな(仮名)

カタカナは、専ら古代寺院の仏教哲学を学習する学校で用いる、いわば男性社会が育成した文字と言えます。

これに対し、「ひらがな」は、「女手」として宮廷女流人によって、このかな文字を使用して和歌や物語、随筆を作り上げていきます。その発祥を考えますに、まず以て延喜・天暦の文化事業を考察する必用があります。菅原道真と藤原時平の政事的拮抗意識から、『類聚國史』と『三代實録』及び『延喜式』にみる律令問題。『新撰萬葉集』(真名歌)と『古今和歌集』(かな歌)〔延喜五(九〇五)年〕といった歌集の対比が後者は国家的文化事業として我が国最初の勅撰集が成り、その選者の一人である紀貫之は、二〇年後、いわゆる承平・天慶の乱の前夜に、はじめてのかな文字で書き綴った日記『土左日記』を表出しています。ですが、この冒頭文に書き記すように「男もすなる日記といふものををんなもしてみんとすなり」と「女文字」として自己をくります作風が見え隠れしています。時期同じくして、東国の無名僧が編纂した軍記物語『将門記』には、これまでの漢文体を脱し得ない書記文字の世界が依然として続いていたことも知り得ておきましょう。新たな国風文化の芽生えの源流といつても、渾沌とした書記文字の流れが都を中心としてあったことについて見逃さないでおきましょう。

紀貫之の名筆『古今和歌集高野切』〔HP図絵参照〕

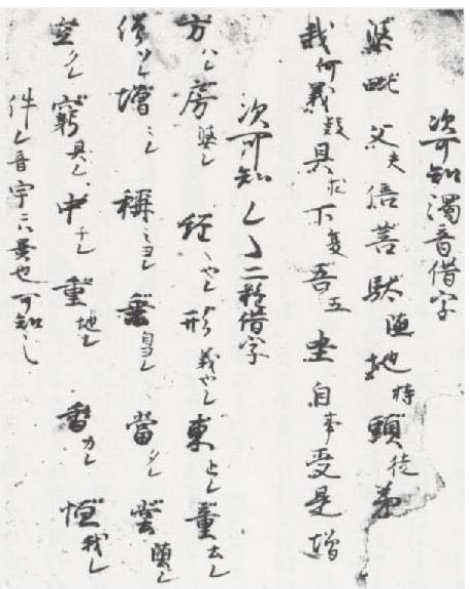
<http://bunka.nii.ac.jp/ResultImage.do?heritagelId=66232&imageNum=0&linkType=huge>

五十音圖

『孔雀經音義』〔十一世紀初頭一〇〇四―一〇二八年頃・醍醐寺藏〕



『金光明最勝王經音義』〔一〇七九年・大東急記念文庫藏〕

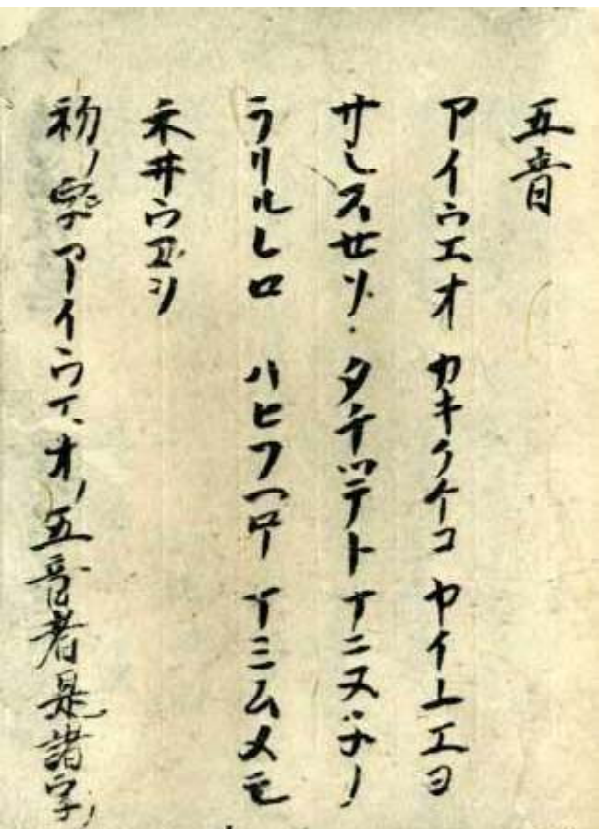


『反音作法』明覚〔寛治七(一〇九三)年写本・醍醐寺藏〕

阿伊烏衣於 可枳久計古 夜以由江与

左之須世楚 多知津天都 那尔奴祢乃
羅利留礼嚙 波比不倍保 摩弥牟咩毛
和為于惠遠

保延二年(一一三六)写『法華經單字』一冊の裏表紙



平安時代前期の文化的所産として、「かな文字」創出ほど本邦の書記言語を培うなかで、これほど大きな意味を持つものはなかつたに違いありません。この「五十音図」の作成には、悉曇学の知識を前提としないでは考え

にくいとすれば、正に、空海が請来した眞言密教そのものの寄与が結実したものであり、今日、この五十音図の制作者と作成年次をも知り得ないことは実に不思議なことであります。この図であつても一つの意識された知的作業であり、そこには、一つの卓越的な独創的な個性が考えられてよいでしょう。しかし、その人物の名は、今以て明確にはできないのです。更には、この文字そのものが寺院や宮廷の女流知識人たちにだけに温存されつつ、広く一般に流布することもなく、いわば、文化の私的化が貞觀期の頽廢を醸し出しているのではないのでしょうか。